

もくじ

特集：我が国音楽界の現状と課題

■てい談

これからの我が国の音楽界を考える

〔東 敦子／尾高忠明／三善 晃(司会)〕 4

- | | | |
|-------------------|------|----|
| 最近の日本オーケストラ界に思うこと | 藤田由之 | 12 |
| オペラ界の現状を考える | 佐川吉男 | 14 |
| わが国作曲界の現状と課題 | 武田明倫 | 16 |

■特別てい談

東京国立博物館120年の歩み

〔藤田國雄／高階秀爾／井内慶次郎〕 18

- ・地域伝統芸能等を活用した行事の実施による観光及び特定地域商工業の振興に関する法律について 24
- ・世界遺産条約について 26
- ・文化財保護企画特別委員会の設置 27

■ 展覧会紹介

- 特別展 日本と東洋の美 28
- 特別展 かなの美 28
- 特別展 正倉院展 29
- 特別展 フランス近世素描展 29
- 特別展 彫刻の遠心力 30
- 秋期特別展示 飛鳥の工房 30

- ・国立劇場ニュース……………31

表紙写真

- (左)ロン=ティボー・ガラ・コンサートの小林美恵氏
(提供：music plant)
- (右)藤原歌劇団公演「ノルマ」
(提供：財団法人日本オペラ振興会)
- (下)東京交響楽団演奏風景
(提供：財団法人東京交響楽団)

題字デザイン※桑山弥三郎

東京国立博物館 I 20年の歩み



井内慶次郎
■東京国立博物館長



高階秀爾
■国立西洋美術館長



藤田國雄
■松濤美術館長



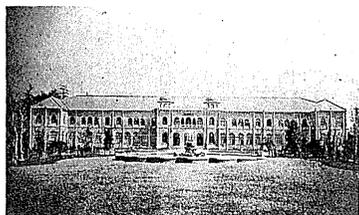
司会 今日はお忙しい中、先生方にお集まりいただきまして、ありがとうございます。東京国立博物館の創立百二十年というところで、い談をお願いした次第です。

ご承知のとおり、東京国立博物館は明治五十年に湯島聖堂内の大成殿を陳列場として、文部省博物館という名前で産声をあげ、それから今年で二度目の遷居を迎えたわけです。それに関連しましていろいろご計画をお持ちのことと思いますが、館長、秋のご計画からお話しいただけますか。

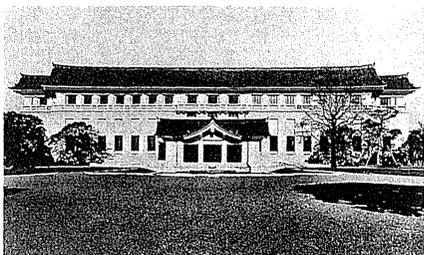
井内 この秋、若干の行事をやるかと思っています。十月十三日から十一月二十三日までですが、中心になるのは二つです。一つは特別展観の『目でみる二〇〇年』、それとあわせて、本館全室で百二十年記念『日本と東洋の美』という館蔵品を中心とした国宝八十件、重要文化財二百一件を含む四百六十三件の特別展を開催しようと思っています。

高階 すごくですね。
司会 明治五年と申しますと、ちょうどその

いのはいかにも日本的ですが、館長、そこらへんはいかがでしょうか。
井内 明治五年に湯島大成殿で文部省が博覧会をやったのが東京国立博物館の創設となっております。それが終わると次にオーストリアでやる万博に出すかと、そういう収集と展覧から始まっています。それから大きな節目として、次に明治十年に内務卿の大久保利通公が上野寛永寺本坊跡に本格的な博物館建設を太政官に上申しました。そして十五年に上野でコンドル設計の博物館が開館された。それから宮内省の所管となった十九年も一つの節目じゃないかと。博覧会という言葉から展覧会に切り変わっているプロセスで、明確なのは明治三十四年のパリ万博出品の日本美術品を中心に第一回特別展、これは明確に博覧会から展覧会になっているわけですね。大正十三年には、当時の皇太子殿下、昭和天



コンドル設計の博物館(明治15年開館)



昭和13年開館の復興博物館(現本館)

皇のご成婚のご慶事の御沙汰によって、上野動物園、上野公園を東京市に下賜されました。東京国立博物館の今の守備範囲が固まってきたようですね。

それから次に関東大震災で壊れた本館の復興があり、昭和十三年十一月十日、昭和天皇の行幸を仰いで今の本館が開館したんですね。東京国立博物館の記念日というのは従来特に設けてないのですが、十一月十日を記念日にするの一案かと思っているんですが。

司会 欧米などの事情をちょっと高階先生お願ひできますか。

高階 日本の場合は百二十年前に文部省博物館というのが出来たんですが、博物館というのと美術館というのがありますよね。我々の感じからいうと一応、博物館のほうがずっと

前年に「古器旧物保存方」という太政官布告がありまして、明治初期のいわゆる「神仏判然令」などで古いものをとかく粗末にするような風潮を戒める意味での博物館の創設というのがあったと思いますが。

藤田 『東京国立博物館百年史』を編いてみますと、この博物館がいろんな意味で手本にしましたのは大英博物館だと分かります。あるいはルーブル。そういう欧米のミュージアムはスタートからだいたい百年から百五十年経っていました、若干遅れてスタートしたわけですね。

博物館は保存機関、社会教育機関、あるいは研究調査機関というような性格をどこももっているわけですが、とりわけこの博物館は明治初年以來ずっと中央博物館、総合博物館的な性格をもっていると思うんです。

司会 国が主導的な立場で博物館が出来たと



博覧会場となった湯島聖堂大成殿

広くいろいろ資料がある。日本の場合も農商務省の所管に一時なっていたということは農産物か何かまで入っていて、天然、自然のものも含まれていた。

ヨーロッパの場合も最初はやはりそうで、大英博物館は十八世紀中頃、ちょうど啓蒙主義の時代ですね。人間の知識はこんなに広いんだという、それに対する自信とそれを見直そうという意識があった。大英博物館の最初は図書館も含めて、知識の集大成として物とにかけ集めようとした。ちょうど同じ頃にフランスで百科全書というのがありました。エンサイクロペディア・ブリタニカというのも、十八世紀後半ですが、百科事典というのは文字の形で知識を集大成する。博物館というのは物そのもので集大成しようという感じが始まったんだと思いますね。ルーブルは来年が二百年祭で、基本的には王室コレクションというのがあるって、これは博物館よりもうちよっと狭くて絵とか彫刻とか宝石という美術工芸品ですね。これがフランス革命の時に民衆のものになった。今まで王室だけのものだったのを公開しようという形で、正式に美術館をつくるということが決まるのが一七九三年なんですね。一応開放すると決めたものの、実際にみんなが行けるようになるのは十九世紀になってからなんです。大英博物館はミイラであるとか美術品だけでない人間の日常の道具とかそういうものも入っている。ルーブルのほうは主として王室コレクション

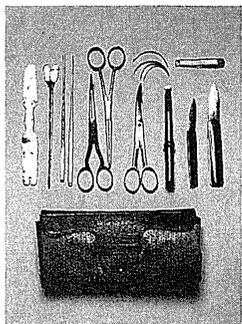
からはじまったものですから、それが先鞭となつて、イギリスも美術中心の館をつくるというふうに分化した形で博物館が発達して、特に美術に関するものは美術館という形になる、というのが欧米のごく大雑把にみた博物館・美術館の歴史だと思ふんです。十九世紀の後半というのは博覧会の時代ですね。万国博覧会、これが美術館の発達と非常に密接に結びついている。万国博覧会が最初に開かれるのはロンドンで一八五一年なんです。この時はまさしく博覧会で、万国といつても数は限られていますが、少なくともヨーロッパだけではなくて当時の世界の物産、及び新しい機械技術というのを見せるといふ形ではじまりました。第二回目が四年後にパリでやるんですが、ロンドンのまねではおもしろくない。というので美術部門をつくるんですね。それ以後、博覧会と美術というのは非常に密接になりました。それがずいぶん成功したために、その後の博覧会は美術部門をつくる。特に代表的なイギリスとフランスを比べてみますと、フランスの場合にはルーブルといふのがあって、それが中央館的な役割をもつていて、美術に関してはあらゆるものを総合的に集める。その他に地方美術館とか東洋の美術館とか工芸の美術館を一応中央につながるような形で考える。それに対してイギリスのほうはむしろ逆で大英博物館といふのはあつたんですが、フランスで美術部門の博覧会をやるといふことで美術館をつくらうという話

になつて、五〇年代に今のロンドンのいろいろな美術館が整備されるんです。その時にいろいろ議論がありして、文化ゾーンの集めたほうがいいという議論と地区に分散したほうがいいというのがあつて、結局、それぞれの地域に、なるべく広い地域の人が自由に行けるような形にしよう、という考え方ですね。アメリカは逆に民間が非常に強いですから、民間主導型でやや遅れて、ヨーロッパの文化をうんと集めようというのがはじまりで、だいたい東京国立博物館よりもちょっと先輩ぐらいですね。

そういう理念を日本は受け継いで、大久保内務卿は例の岩倉使節で欧米絵画の視察に行った時にずいぶん調べて、文明開化の時代に博物館は必要であると認識した。そうすると当然、欧米と同じように古いものをずつと集める。戦後になつて西洋美術館ができるか近代美術館ができるか、分化しながら発展してきたという状況だろうと思ふですね。井内「目でみる一〇〇年」のほうは、いろんな資料で百二十年を綴ろうといふことでこの博物館にとつて非常に影響が強かつた町田久成筆の博物館の門額、湯島聖堂の博覧会の関係資料。ウィーン万博の関係資料等も展示します。ウィーン万博に関連して、明治七年にニール号沈没という事件があつた。その関係のものも今回展示するつもりです。

実は、ウィーン万博の時、博覧会事務局副総裁であつた佐野常民等の努力で、現地では

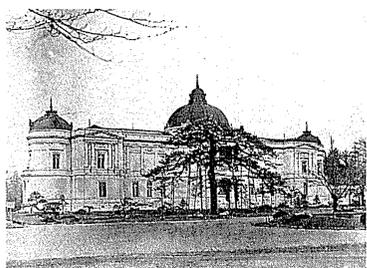
英国のサウスケンジントン博物館、現在のビクトリア・アンド・アルバート博物館のオーエンという館長が、日本はウィーン万博に来て、帰る時にずいぶんいろんなものを買ひ集めて、博物館の陳列品にしたいと運んでいったその船が沈没した。まことに同情に堪えないといふことで、館長が各国に呼び掛けて美術工芸品を日本に寄贈したんですね。その中に英国製の磁器でミントン窯とドルトン窯のものがあつてそれが現在ピアソン社といふ会社に属してしまつて、そのピアソン社の東京支社から、今回百二十年の歩み展があり、その時のものが何点か出品されるようだというので、是非わが社も若干でも展覧会に協力したいといふお話があつた。今回その関係のものを十点ぐらい出すことにしているんです。



シーボルト所用外科道具

井内 この百二十年の資料展には、寛永寺の司会 やはりそういう民間の方のご協力というのが今後の博物館には欠かせないことだと思ひますので、たいへんありがたいお申し出です。

井内 この百二十年の資料展には、寛永寺の司会 やはりそういう民間の方のご協力というのが今後の博物館には欠かせないことだと思ひますので、たいへんありがたいお申し出です。



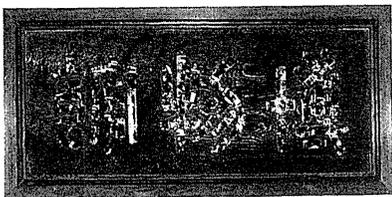
開館当時の表慶館
(現在は考古遺物を陳列、明治42年開館)

影義隊に向かつて打つたアームストロング砲の不発弾も出ます。高階 本郷台地から上野の山に打ち込んだんです。

井内 その他、シーボルトの外科道具一式、ペリー提督の袴章とかボタン、胸飾り。伊能忠敬の大日本沿海輿地全図等。

司会 明治十五年開館のコンドル設計による本館は、これは第二回の勸業博覧会に美術館として使つたものをそのまま引き継いだ形になります。四十二年には表慶館ができて、大正十三年に関東大震災があつてコンドルの本館が壊れ、現本館が昭和十三年に開館といふうな歴史を辿ります。第二次世界大戦といふ不幸な歴史がありまして、その間美術品の疎開をしたわけですが。

井内 その点を資料でちよつとみますと、所蔵品を分散疎開しようという方針は相当早く



町田久成筆 博物館門額



湯島聖堂博覧会の陳列品
(錦絵「古今珍物集覧」)

ろんな美術工芸品を買ひ集めたんですね。ニール号に積んで日本へ帰ってくる途中、明治七年の三月二十日に伊豆半島沖まで来て沈没してしまふ。そこで佐野副総裁の友人で、

決まつたが実際に疎開が始まつたのは、閉館措置が決まつた二十年の三月以降、福島と京都に主としてもつて行きました。戦後それらを東京に持ち帰つて二十一年の三月に展覧再開となるわけですが、三上次男先生の遺稿集『春日抄』に二十一年の春の東京帝室博物館の再開の展覧会をご覧になつた時の感激が次のように述べてあります。『敗戦後まもなく昭和二十一年の春であつたと思う。東京はまだ焼け野原で家族は疎開先の地方から帰らず、我々も食料の買ひ出しに真剣だったが、そんな荒涼とした時期に、上野の帝室博物館で日本の古美術の大きな展覧会が開かれた。食料を得るために上野の駅に出掛けた私は、この展覧会を知つてぞくぞくと詰め掛ける人々の後ろについて博物館に入ったが、その時受けた強い衝撃は表現を絶したものであつたのを覚えてゐる。……それにしても同じように腹のへつていた当時の博物館の人々が美術品を疎開先から運び返すすぐさまこれを国民の前に広げてくれたのは偉かつたと思う。これに触れて感動し、力を与えられ、生への戦列に復帰した人は多かつたであらう。私は戦前、戦後かなりたくさん有名な博物館、美術館を訪れ、あるいは良い展覧会を見て感銘を受けたけれども、これほど心を奪われ、美術から救いを得たことは空前であり、おそらく絶後であらうと思つてゐる。』

昭和二十一年春の再開の展覧会というのは大変な意味を持つたようですね。

百二十年記念『日本と東洋の美』は本館の全室をつかってやりますが、これは、創立以来百二十年の間に当館の所蔵となった国宝、重要文化財を中心に見ていただこうという大きな規模の展覧会です。また、当館に所蔵するにいたったものと元来、一具の作品、例えば「北野天神縁起絵巻」については当館にあるものとシアトル美術館、大東急記念文庫にあるものを並べ、それから「駿牛図」については、クリブランド、シアトル、藤田美術館、五島美術館等のものを並べます。

司会 大正八年に益田鈍翁などによつて分割されました「佐竹本三十六歌仙絵」、これはもともと二巻だったわけですが、それらをできるだけ集めて元の姿を彷彿とさせようというのは一つの大きなねらいだと思いますね。

藤田 今、次の展覧会のご趣旨をうかがったんですが、私は、この博物館は帝室時代にはやはり皇室の庇護があつて、中央博物館的な性格を非常に強くもつていた時代ですけれど、寄贈品というのが非常に大きなウエイトを占めているんですね。戦前の話ですが、購入費は当時の金で十万円くらいしかないんですけど、その時代に、今、根津美術館に並んでいる有名な三つ一組の青銅器が一つ十五万円なんです。そういう時代に十万円の購入費でこは主として日本美術を中心に集めた。その時代に帝室の名前で寄贈になる方が相当あつた。もう一つは考古学の資料に関しては、先史時代、縄文、弥生のは帝大の人類学教室、

として、大学、学会関係との研究面での連携プレーをどう促進するかという、問題もあります。また、そういうった問題を考えるにあつて上野の山全体の文化的環境をどう整備するかという視点をもつ必要がある。第二本館新設問題は約三年間、館内で協議してきたんですけども、本館、表慶館、東洋館が並ぶ前庭の配置と外観、これは最大限尊重したらしいことになってきております。

藤田 前庭の問題は私もそういう意見なんです。前の広がりというのは大事にしたい。さてそうなるかどうかをどうしたらいいか、これは難しいと。私は地下を大いに利用したらいいと思うんです。それからもう一つ暴論を申し上げますと、本館から事務室がみんな出してしまうと、今の事務室を寄贈品のメモリアルルームにする。そうするとかなり空間ができるような気がしますね。今、京都国立博物館には修理所がありますけれど、東京にはまだありませんね。やはりこのミュージアムはそういう機能をもつてなきゃいけないという気がしますね。

井内 それに最近の激しい時代の変化、国際化、情報化、生涯学習時代の到来、成熟化という現象、そういう時代の変化に対応して当館の在り方を考えることが大事なことと思っております。

高階 博物館・美術館というものの役割というものを考えてみると、基本的には美術作品

それ以降の原史時代を中心としたものは帝室博物館に帰属する制度があつた。それがこの考古資料が充実した一番大きな原因ですね。それから徳川頼貞さんから莫大な寄贈があります。考古品に関しては、それがほしい中心です。文化庁になりましてから、国で買上げたものを三国立博物館に分けるということでもかなり増えております。本流の古美術品に関しては戦前の例えば松平さんとか、今の益田鈍翁、横河コレクショ、戦後では広田コレクショですね。あるいは高島菊次郎さんの書跡を中心に莫大な寄贈があります。そういう方たちに対する顕彰という感謝の意味をこめた展覧会になると思いますね。

井内 あと十年で二十一世紀を迎えるにあつて東京国立博物館としてのように整備していけばいいかということ調査会をつくつて検討をはじめたんですが、藤田さんからお話のあつたようにたくさんのご寄贈をいただいておりますので、そういう方々のご寄贈を顕彰する顕彰展示室のようなものが必要ではないか。また、基本的な問題として特別展、共催展を平常陳列の体系をくずすことなく開ける専用の面積を確保すべきではないか、等々検討しております。

司会 今、館長から東京国立博物館の構内整備の中、長期計画のお話が出ましたが、まず今ご提案がありました特別展の会場ですね。高階 これはどの美術館でも問題があるんですが、だいたい常設と特別展の会場という

する情報を収集・保存・公開するというのが基本的な役割だろうと思うんですね。収集という問題、今後ともやはり博物館・美術館というのはやはり国民全体がつくつていくものなんです。税金を使うにせよ、寄贈をいただくにせよ。その場合にその税金の使い方をどうするかということ、寄贈はいろんな形で、各頭をひねっていますが、寄贈のしやすい形を考える。フランスでは特に最近、遺産相続の時に物納制度を認め、国の美術館に入れていく。あるいは生前から遺贈というのはおかしけれど、約束を取りつけておいて所有者が生きておられる間は一定の年金を払うというような形を考えているんですね。

司会 それから作品をいただくにしても優遇措置といえますか、税法の改正なんか絡むんでしょうけれど、少しでも気持ちよくいただけるような環境づくりですね。

藤田 顕彰というのは気持ちだけの問題じゃなくて、実質的な顕彰というか例えば税制上の優遇措置というのは日本はまだちょっと足りないような気がしますね。

東京国立博物館には美術、歴史、考古に関する学術資料というものが、集まっているわけですね。それは主として図書・写真・拓本・絵図などですが、それを公開するのに資料館ができた。大英博物館などには及びませんが日本では唯一の存在です。資料館の使命というの是非常に大きいと思うんです。また、社会教育機関として、保存機関として、これか

のは別になつていて、場所が足りないというのはどこでも同じようなところがあつて、苦勞している博物館が多いわけです。美術館・博物館の役割として貴重な作品を集めて常時陳列するということが基本ですが、しかし、しかるべき作品が従来の常設とは違った形ですぐれた作品を展示できるという意味で、特別展というのはどうしても必要なものだと思います。

藤田 平常陳列というものがミュージアムの主流であるということは戦前から現在にいたつても同じであると思いますが、啓蒙とかいろんな意味で今は特別展というのがかなり比重が高くなつていて、博物館に行くということは平常陳列を見るところよりもむしろ特別展を見るところという意味を一般に与えている。しかし、本来の姿はやはり平常陳列です。例えば昔は月ごとのジャンルごとの陳列品目録が出ていたね。例えば「普賢菩薩」を見たいならいつ行けばどの壁に出ているというのが分かった。それが今特別展で会場をふさいでしまつて、くずされているというのが現状だろうと思います。

井内 それから当館の大きな問題として、考古の資料を展示する絶対の面積が不足している。また、本館、表慶館、東洋館の内部を本格的に改修しなければという問題、法隆寺宝物館の改築、更に収蔵庫、修理工房の整備も非常に大きな問題になりつつあります。資料館をもち、これだけ収蔵品をもっている当館

からも重要な使命を担つてゆくと思います。それからもう一つは調査研究機関と申しますか、これは大学とか研究所のもつ使命とはちよつと違う、物に即した実学的な研究機関だろうと思ひます。欧米では海外の発掘調査の中心がミュージアムの場合が多い。日本の場合はほとんど大学が中心になつていて、ミュージアムがもつユニバーサルという公平とかそういう性質が海外調査などの中心になるのに向いています。

高階 調査研究に関しても連携プレーですね。こご自体もちろんやらなくてはいけないけれど、他でやっているのと一緒にやる。あるいは海外と一緒にする。資料なり物なりは博物館・美術館が大部分をもっているんですから、集めて、それを外部の研究者に公開するという形で。

藤田 資料部の場合、一般的、基本的な資料を集めるのはこご。もつと専門的なもの、特殊なものは例えば研究所で。そういう連携ができればいいわけ、こごで全部する必要はもちろありませんね。

司会 そういうことを含めまして博物館の将来というのは国民の方々に対する広い意味でのサービスを目指していかなきゃいけないんだらうと思ひますが、今のご提言のように資料部も含めまして将来、力を入れていけばよろしいと思ひますね。

今日は本当にいろいろと貴重なお話をいただきました。ありがとうございます。

編集後記

臨時教育審議会の答申でも、情報化に対応した教育を進めるに当たっては情報化の光と影を明確に踏まえ、影の部分を補うような十全な取組みが必要である旨指摘されている。芸術の分野においても、情報機器の発達に対応した情報機器の活用方法の研究を進める必要があるとともに、芸術家と観客の双方について、間接経験の肥大化その他、情報化のマイナス面にも対応していくことが必要となっている。特に、芸術を享受する側については、国民一人ひとりが年齢や居住地の区別なく、生の芸術に親しむ機会が拡充され、優れた芸術鑑賞者が着実に増加していくことが期待される。

「文化庁月報」十月号

(通巻第二八九号)

平成4年10月25日印刷・発行

編集文化庁

〒100 東京都千代田区麹町3丁目2番2号

発行所 株式会社ぎょうせい

本社 千代田区中央区箱根7丁目4番12号

営業所 千代田区新富町西五軒町4丁目2

電話 (03) 33681241 (代表)

振替口座 東京 91161番

印刷所 株式会社印刷所

定期購読のおすすめ

本誌のご購読のお申し込みは、直接弊社の本・支社、あるいは最寄りの書店へお申し込みください。

定価 一〇〇円(本体一八四円)(送料四六円)年間購読料 一、二八〇円(税込)

広告の問合せ・申込み先

株式会社 ぎょうせい 営業第二課・宣伝係
☎(03)3269-4145 (ダイヤルイン)